



来[4]

3月3日

Sudden Fiction Project

高階經啓
hirotakashina

3月3日のおはなし「来[4]」

部屋を片付けてさっぱりしたら、景気のいい声が近づいて来た。

しばらく耳を澄ませていたが、声はそのまま通り過ぎていってしまった。声がすっかり遠ざかってしまうと後はしんとしてもう何も聞こえてこない。おれはそのまましばらくじっとしていたが、もう誰も来ないようなので窓をふさいだ板をずらしそと外の様子をうかがった。家の前にも森の中にも人の気配はなかった。おれはほっと息をついて窓辺に置いた椅子に腰をおろした。

目の前の低いテーブルには、さっき片付けの最中に見つけたお茶の葉が乗っている。イワノフのお茶だ。遊びに行くといつもイワノフはこのお茶を入れてくれた。故郷で飲んでいた飲み物に似ているのだと奴は言っていたが、おれにはこのあたりの村人が飲むものとどう違うのかよくわからない。おれの国ではお茶を飲む習慣などなかったからだ。でも奴の小屋に通ううち、イワノフのお茶をおいしいと思うようになった。

思えばずいぶんまめな男だった。お茶を入れ、料理をつくり、山の中で拾って来た木の实を使って菓子を焼いたりもしていた。おしゃべりな男で、料理一つひとつについて、故郷での思い出話を聞かせてくれる。これは自分の方が女房より上手に作れる。こっちのパイはもっといい肉があれば良かったんだが。女房の作る菓子は絶品で、子どもたちは大はしゃぎだった。子どもの話を始めると遠い目になり止まらなかった。

そして二言目には言ったものだ。みんなと仲良くしたいんだ、ゲオルク。食べ物基本だろう？ おいしいものを一緒に食べれば人と人は仲良くなれる。そんなものかな、そんなにうまくいくものかな。一瞬おれはそう思ったが、考えてみれば、事実おれ自身がうまいお茶やうまい料理を目当てにイワノフのところに通っていたのだから、当たっているのかもしれない。

ある日、イワノフは村人に宛てて手紙をしたため、招待状を送った。小屋をきれいに掃除し、料理やらお菓子やらお茶やらおみやげやらを用意した。あの臆病な原住民どもが来るもんかとおれは言ったが、案に相違して何人かの村人がやってきた。思ったより好奇心が強いのもかもしれない。森の中の道を案内状の通りにたどって来て、イワノフの小屋の前に現れた。

小屋の前に置かれたテーブルには、土産の包みと菓子を乗せた皿があり、イワノフが勉強して覚えた土地の言葉を記した添え書きの紙をその皿が押さえていた。添え書きには、これをつまんでお待ちください、おいしい木の实のお菓子です、お土産は自由にお持ちください、と書いてあった。村人たちは土産を手に取り、ひとりが恐る恐る菓子を口に運んだ。それを見てイワノフは満面の笑みを浮かべて小屋から出てきたんだ。

結果はさんざんだった。村人たちはイワノフが近づくと恐怖で逃げ惑い、いぎたなく持ち帰った土産も結局食べられることはなかった。イワノフの作った食べ物を投げ捨て踏みにじった。長持ちするようにと、イワノフが丁寧に包んだお茶の葉を燃え盛る火の中に投げ込んだ。その全てをおれは見てしまった。イワノフもたぶん見てしまったと思う。おれは腹が立った。煮えくり返るくらい腹が立ったので、原住民の村を襲撃してやろうかと思った。あいつらはイワノフのことを赤い悪魔と呼んでいたのだ。

ところが翌日おれが小屋をたずねるとイワノフは気の弱そうな微笑みを浮かべておれに尋ねた。何がいけなかったんだろうね、と。正直おれは、こいつ阿呆かと思った。でもすぐに考え直した。おれは一人でも生きて行ける。こうしてたまにイワノフと会っているだけで十分だ。村人なんか要らない。でもこいつはもっとたくさんの人間とつきあっていないとやっていけないんだ。料理が上手で、おしゃべりが大好きで、なにより人間が大好きなんだから。

そこでおれは提案した。今のままじゃ、あいつらは近寄って来ない。お前が好かれるきっかけ

が必要だ。これからおれが村に行つて暴れるから、おまえはおれをぶん殴つて追い払え。あいつらはお前のことを赤い悪魔、おれのことを青い悪魔と呼んでいる。青い悪魔は悪者で、赤い悪魔は村人の味方だと思わせればいい。なに、おれはあんなやつらと仲良くする気なんかこれっぽちもないから安心しろ。

イワノフは心配してくれた。それじゃあ、お前が悪者になってしまう。村人に嫌われることになる。心配するなイワノフ、おれなら大丈夫。おれは村人と友達になりたい何てこれっぽちも思わない。正直な話、お前がそこまでお人好しでなければ、このあいだの件で村に仕返しにいこうかと思つていたくらいだ。だめだよ、ゲオルク、本当に暴れちゃいけないよ。心配するなイワノフ、暴れる振りをするだけだ。

計画は大成功だった。村人はすぐにイワノフと仲良くなった。計画外だったのはイワノフは思つていたより力が強く、殴られたおれがしばらく寝込んでしまったことだが、それでも物事が思った通りに進んで大満足だった。でもやがて気がついた。このままおれとイワノフが今まで通り付き合っていたら、村人はイワノフを疑うに違いない。そこでおれは怪我が治るとすぐに、痛い腰をさすりながら棲み家を引き払った。

ところが悪い噂は足が早いもので、あっという間に先回りする。暴れん坊の青い悪魔がいままでにどんなひどいことをしたか、尾鱈はひれがついて広まっていた。行く先々でおれは恐ろしい魔物扱いされ、何度も山狩りに合った。おれは転々と場所を変えた。気配を隠し、用心して山の奥深くを選んで棲むようにした。何度も山を越え、谷を越え、はるか遠くを目指し、ここに辿り着いた。

ひっそり暮らして冬を越し、あれから一年近く経った。いまはこうして横穴に隠れ住んでいる。泥で塗り固め、外からはただの崖にしか見えないようにして。狩りのためか山菜採りのためか、時おり山道に踏み込んで来る村人たちに会わないように気をつける。野生の豚を狩り、鹿をつかまえ、野草と一緒にぐつぐつ煮込めばそれでいい。おれはもともと料理の味なんか気にしない。

でもこうしてイワノフのお茶の葉が見つかったのは素直に嬉しい。それは初めてイワノフが村人に招待状を書いたときにつくったお土産の包みのひとつだった。どうしてそれをおれが持っているのかは、よく覚えていなかった。イワノフがくれたんだろうか、村人が投げ捨てたのを拾ったんだろうか。丁寧にくるんだ包みをほどき、お茶の葉が顔を見せると、おれは思わず、ああ、と声を上げた。ああ。イワノフのお茶だ。

外に誰もいないのを確かめてから火を起こし、湯を沸かした。そうしてイワノフがやっていたように、お茶の葉を湯に放り込み、しばらく時間を置いてから器にあけて飲んでみた。味はひどく薄かったが、あそこ飲んだのと同じような味がした。イワノフの小屋と同じ香りがした。お茶の葉の包みから紙がのぞいていたので手に取ると、ゲオルク、時間を置くと味が落ちるので早く飲んでくれ。賞味期限は1カ月以内だ、と書いてあった。全くまめな男だ。そう思ったら無性にイワノフの料理の味を思い出し、気がついたらおれは大声を上げて泣き出していた。

(「期限」 ordered by tom-leo-zero-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

● [「SFPインデックス」](#)

感謝の言葉と、お願い&お誘い

Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？ もしも気に入っていただけたらぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただくと大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできますようですが、面と向かって星をつけるのはひょっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→[公開中の作品一覧](#)

SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「[Sudden Fiction Project Guide](#)」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、[Facebookページ](#)などに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「[急募！お題 この秋Sudden Fiction Project開催します](#)」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験済みですが、かなり楽しいですよ！ はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひ一緒に盛り上がってまいりましょう。

来[4]

<http://p.booklog.jp/book/45176>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/45176>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/45176>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.